

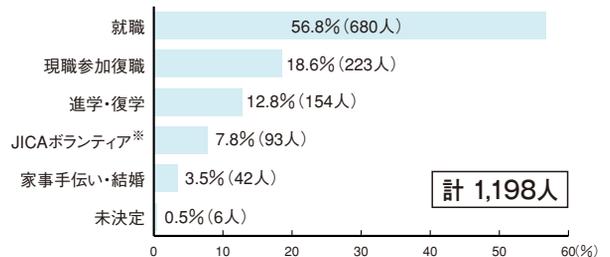
Q 青年海外協力隊員は 途上国での活動を終えた後、 どのような進路を歩んでいるの?

毎年、開発途上国で貴重な経験を積んだ約1,200人の青年海外協力隊や日系社会青年ボランティアたちが日本に帰国している。
気になる帰国隊員の進路と、JICAの進路支援とは。



ブラジルでの日系社会青年ボランティアの経験(上)をもとに、現在は出稼ぎ日系ブラジル人の子どもたちが通う小学校で、日本語学級の講師を務める帰国ボランティア

◆平成18年度 青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア 進路状況



(注)平成18年4月1日～平成19年3月31日までの帰国者
※短期ボランティア83人、シニア海外ボランティア6人など

JICA青年海外協力隊事務局
帰国ボランティア支援課

浦山 友里恵

PROFILE

民間企業秘書室を経て、1993年に社会人採用。研修員受入事業、ボランティア事業など主に国内業務に携わる。2007年8月より現職。



「ボランティアの経験は、どの道に進んでも、 必ず大きな財産となるはずです」

帰国後の進路を不安視する声も聞かれますが、仕事もボランティア活動も、目標と熱意、創意工夫、自己管理能力、コミュニケーション能力など重要なことは同じ。これらを踏まえて活動に取り組めば、それは帰国後にもつながるはずです。

とはいえ、一人一人の職種や年齢、現地の経験や考え、進路決定までのプロセスと期間が大きく異なる中、帰国者の進路を一つの傾向としてとらえることは容易ではありません。ただし、途上国で現地の人々と向き合い、さまざまな課題に対処してきた経験は、帰国後どの道に進むにせよ、必ずや大きな財産となって生きてくるでしょう。

就職以外では、専門性を深めるため、または新たなキャリア形成を目指すために進学する人もいれば、JICA短期ボランティアに改めて参加する人もいます。また、多文化共生や地域づくりなど、日本社会の課題に取り組む事例も増えています。

現職参加者の復職と契約社員・契約職員も含め75%以上の帰国隊員が就職しており、内訳は、民間企業が約4割と最も多く、続いて公益法人や教員、地方公務員などが続いています。最近では、ボランティアの経験を評価し、特別な採用制度を設ける地方自治体や教育委員会も増えています。

A 平成18年度に帰国した青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア※の帰国後の進路は、就職や復職のほか、進学や復学などが大多数です。

「変わる、つながる、私の未来」
JICAボランティア、OB・OGストーリー」



<http://www.jica.go.jp/activities/kikoku/>

帰国ボランティア で 検索

JICAの進路支援やOB/OGの経験談はこちらから!

JICAでは、帰国者の進路開拓のためにさまざまな支援を行っています。「就職」「進学」「国際協力」などテーマ別に毎月実施されている「進路開拓セミナー」をはじめ、各種研修では、自己分析や進路情報の収集を助けるとともに、社会で活躍する隊員OB/OGとの交流の機会を提供しています。また、全国に配置されている25人の専門カウンセラーが、随時、進路相談を受け付けています。さらに、帰国ボランティア専用のホームページなどを通じて、企業・団体からの人材募集の情報や、研修・セミナーの案内なども入手できます。

それ以外にも、国連ボランティア(UNV)に推薦し、派遣にかかる費用をJICAが負担する「UNV制度」や、キャリアアップのための知識や技能、免許・資格の取得を目指す帰国者を支援する「教育訓練手当」、国際協力に携わるNGO/NPOでのインターン活動を支援する「NGO活動支援制度」などがあります。詳細はホームページをご覧ください。

※中南米地域の日系社会で、移住者や日系人の人々と生活し、日本語教育や保健、福祉などの分野で地域社会の発展のために協力するJICAボランティアのつ。